

伊那市立伊那小学校 総合学習・総合活動

総合的な学習の時間の授業時数が新しい学習指導要領で減少する一方、小学校段階からのキャリア教育活動が求められています。教育行政が様々なアプローチから「学びちから」を育成しようとしている中、40年に渡り子どもたちの学ぶ意欲、内からの育ちを大切に、総合活動、総合学習を進めている伊那小学校で授業を参観させていただく機会をいただきました。学校の研究会への指導をされる文教大学の嶋野道弘教授の学校訪問に同行させていただき、授業の様子をレポートします。

■小学生が探究科？

「『プーリー』を使えばいい。」

5年勇組での総合活動「作って遊ぼう 勇組風車発電所」の授業での児童の提案です。「これが小学5年生の授業なのか、高校の探究科の授業のようだ。」と、目を疑ってしまいました。

このクラス（勇組）では、4年生の5月の図工でかざぐるまの作成がきっかけとなり、風力発電所（発電できる風車）の作成に取り組んでいました。伊那小学校では、3年間を通じて子どもたちが興味を持ち、自分たちで決めたテーマに沿って、総合学習・総合活動を実施しており、5年生はその中間の学年にあたります。



グループ毎に、風力発電所（風車）を検討します。

9月1日の授業では、既に風車の基本は出来上がり、次は、如何に発電機を取り付け、風車の動力を伝えるかという段階でした。

「プーリー」とは、車にベルトやロープなどで動力を伝える滑車のことで、小さい力で重いものを持ち上げたり、力の方向を変えたりする仕組みのことをいうのですが、冒頭の提案は、風車をうまく発電につなげるために意見交換をしていた時に児童が発した言葉です。

「プーリー」だけではありません。「ベアリ

ング」「ダイナモ」、名前だけなら知識として知っているかもしれませんが、それらの仕組みを理解し、どのような場面に活用できるか考えて、

提案できるのです。軸とギアが滑ってしまう課題に対しては「軸にギザギザをつければよい（ギア状にするということ）」とか、風車を風向きに合わせる回転板をうまく回す課題に対しては「幅は〇〇mmの方がよい」とか、子どもたちが「探究」して、意見を述べており、まるで企業のものづくりの現場でのアイデア会議のようでした。



探究している姿勢は、風車の形にも表れます。チームによって回転台が下であったり、上であったり、発電機を取り付け位置もチーム毎に異なっていたり、風車の形も3枚羽根や4枚羽根であったり、様々です。何故、回転台が上なのか、下なのか、その時は気付かなかったのですが、いただいた資料の中に、その経緯の一端が書いてありました。

風車が出来上がり始め、実際に設置した際、強風に倒れそうになるという課題が出ました。このため、設置台のバランスを検討し、支柱を短くしたり、回転板の取り付け位置を変えたり、自分たちで課題の解決方法を考え、工夫した結果として様々な形となっていたのでした。

子どもたちは、ただ書籍やインターネットから知識を得ているのではありません。去る6月28日、臨海学習で渥美風力発電所を訪ねていました。発電機の種類についてアドバイスをもらい、回転がスムーズになるためにベアリングが必要なことなども教わってきたのです。産業の先端で行われている技術を見て、そこで働いている人たちにアドバイスをもらい、自分たちが作りたいものを完成するために生きている知識を「学ぶ」姿がそこにはありました。

「ああこれが、キャリア教育の理想型の授業なのかな。」と思いました。学校での「学び」と実生活で必要とされる「学び」とのズレ、違いが課題となっている中で、実にいろいろなことがうまく回っています。体験も、ただ、行ってくるだけではなく、自分たちが行いたいことに結び付いた学習、理科、算数の知識、臨海学習等々、すべてがうまくつながっている感じがしました。

■白熱し、議論し、「考える」子どもたち

「つけたし!」「はんたい!」「〇〇くんにしつもん!」と一斉に多くの子どもたちの手が挙がりました。手の指は、1本指であったり、2本指であったり。



「つけたし!」「はんたい!」と元気な声が、教室内に響いていました。机の配置はコの字型です。

4年礼組の授業では、地域の偉人の御子柴艶三郎（つやさぶろう）のことを地域に伝えるための活動をしていました。水不足に悩む上荒井台地へ横井戸を掘り水脈を発見した艶三郎について、地域の人に伝える学習が行われていたのですが、伝える方法の議論の中の、子どもたちが手を挙げる際の様子です。

「演劇がよい。」「そのために、演劇の公演のチラシを作りたい。」「劇をやる前によく調べることが大事だ。」

「艶三郎の本も作って地域に知ってもらえ

ばよい。」「本は作るのに1ヶ月はかかる。」など、具体的に伝えるための活動に向け、議論が進められます。

議論の進め方として、発言した児童の意見に対して、「付け足し」で意見を述べる場合、「反対」して意見を述べる場合等、議論を発展的に



伊那市上荒井地区にある[艶三郎の井]の円筒分水

進める授業が行われていました。ディベート（議論）を行うことに慣れていない世代としては、小学4年生が、相手の意見に対して、自分の意見の立場を瞬時に判断し意見を述べる様子は、非常に新鮮で、「今の小学生は相手との関連を考えてここまで意見を述べることができるのか」と驚きました。

ただ、授業後の先生たちの勉強会（指導者のアドバイス）では、板書（ばんしょ）を児童にさせていることで、議論の方向性にバラツキが出ており、もう少し先生が関わった方がよいとの指摘がされていました。このような授業形態が行われているだけでも驚きだったのに、さらにレベルの高さが求められていたことにも、驚かされました。



議論の司会や板書も児童が行います。

子どもたちは、議論のみしているだけではありません（そこには先生の材料提供がありますが）。「艶三郎の井」を見学に行き、地域の人たち聞き取り調査を行い、アンケート活動も行うなど「人とのかかわり」の中で、艶三郎の実像や地域の方の気持ちなども調査し、実際の「社会」とのつながりの中で学んでいました。

■伊那小学校の三つの「ない」？

総合学習・総合活動を支える伊那小学校の特徴として、三つの「ない」が上げられます。

一つ目は「チャイムがない」ことです。児童たちは活動・学習に集中する時は、休み時間に関係なく集中します。自分たちのペースに関係なく集中を遮ってしまう「チャイムがない」のです。実際、総合活動に取り組んでいた3年順組は、午前中、ずっと集中してアイガモの小屋を作っていました。

残りの二つの「ない」は、「時間割がない」と「通知表がない」です。時間割は、一週間の固定した時間割がないということであり、児童の状況によって、翌日の活動が決まるとのことです。(当然、算数や国語等の必要な教科を折り込みながら実施されます。)

また、「通知表がない」ことは、小学校のホームページでも書かれていますが、保護者に児童の状況を通知表という一定の形式で伝えるのではなく、児童の長所・短所、学習状況のつまづきなどを具体的に保護者に伝えるために、通知表によらず保護者との個別懇談によって、時間をかけて子どもたちの様子が伝えられます。子どもにとって、保護者は非常に大きな存在であり、影響も非常に大きいものです。保護者が子どもの具体的な課題等を把握していただく上では、一つの注目すべき手段ではないでしょうか。

■学ぶために工夫する風土

教科書に載っていない事項を学ぶ授業は、先生たちも、その授業を進めるために学んでいるようでした。学んでいるという語弊があるかもしれませんが、実施内容について、外部の指導者(文教大学 嶋野教授ほか)を招いて、それぞれの授業についてアドバイスをもらっています。

行政の人間として気になるのは、その講師経費の算段です。校長先生に「市や保護者が負担してくれているのですか」とお聞きすると、先生は意外な顔をしたように「いいえ、研究の中で得られた収入で負担しているのです。」とのことでした。

研究会の成果物の研究紀要を参加者に購入してもらい講師費用を捻出するとともに、学習に必要な材料費等は、各学級での子どもたちの学習を支えてくれる地域の企業や保護者の支援、学校の資源回収等の収入により

まかなっていたのです。



3年順組では、アイガモの小屋を作成中。アイガモ農法も実施中。

子どもたち自身も、飼育する生物の小屋を作成するために木材が必要となった場合に、「〇〇建設のおじさんが近所だから、頼んでくるよ。」とか「うちの親が、〇〇研究所に勤めているから教えてもらおうよ。」とか、親のつながりから課題を解決しようとしているのです。

先生たちも、子どもたちも、社会とのかかわりの中で授業を行っているためなのか、学ぶために非常に現実的な解決策を工夫していました。

■人や社会、自然とつながる授業

児童たちの授業が終わった後に、学校のすべての先生が集まり、研究会の中心講師をされていた文教大学の嶋野教授(元埼玉県主任指導主事、元文部科学省初等中等教育局主任視学官)から、総まとめの講話がありました。

「我々次第で、自然や社会は陳腐化しない。」

嶋野教授が「教育の精神」として、「子どもは、人や社会、自然とかかわり合いながら、知を構築し、自己を形成し、個性を伸長開花させ、一人前の人間としての成長・発達を遂げていく。教育とは、こうした子どもの成長・発達を扶(たす)ける営みである。」と語ったときの言葉です。

今の学校教育の中身が、社会的に求められている知識、資質と乖離してきているとの指摘を受ける中で、子どもたちを取り巻く自然、社会を教科書とは関係のない「陳腐化」したものとして、「社会的に自立して、地域の現在

の資源（自分の周りの自然、社会）を活かすことができる子どもたちを育てるのは「我々次第」だよ」と言っておられるようでした。



文教大学 嶋野教授の講評

今回、伊那小学校での授業では、学校での学びが社会とこのように繋がっているということを示す、非常にわかりやすい授業を参観させていただきました。

伊那小学校には毎年100人程度の視察者が訪れるという全国的にも非常に注目されている授業が行われています。

伊那小学校が追求する子どもたちの学びの効果を如何に表し、義務教育としての必要性として位置付け、多くの教員に取り組んでもらえるようにすることができるかどうかは、教育行政に求められた課題なのかもしれません。

（文責：教育総務課 島田俊彦）